

「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム 参加報告書」

京都大学文学研究科 博士1年 白川晋太郎

①学習成果

以下③で述べるプログラム以外にも、シンガポール国立大学（以下、NUS）やイエール-シンガポール国立大学カレッジ（以下、Yale-NUS）が提供する講義・演習に積極的に参加した。特に印象に残り、今後の学習・研究面において参考になると思われたのは以下の3点である。

(1) 見せ方にこだわる講義：二つの学部生向けの哲学講義に出席したが、いずれも内容だけでなく、視覚に訴えかけるスライドや話のテンポ・間などを含め入念に準備されているという印象があった。哲学を専攻していない学生にも関心を持たせる講義の仕方を考える際に大変参考になった。

(2) 活発な質問と議論：演習形式の授業では発表者の話が終わるや否や次々と質問が飛び出した。一言も発しないでいるなど考えられないという雰囲気があり、（時には相手の話をさえぎってまでも）積極的に議論する。日本ではなかなか見られない光景に圧倒された。

(3) 学生の発表に対する詳細なフィードバック：院生の研究発表においては、内容に対するフィードバックとは別に、論文の書き方、発表の仕方、話し方、説明の順序など形式的な面に対するコメントも多くなされていた。また司会役も学生が務め、全体として学会発表の練習がなされているという印象だった。

以上の3点から見えてくるのは、公の場でみずからの考えをしっかりと述べる力が重視され、重点的に教育されているということである。日本人学生が海外の学生と議論する場合往々にして圧倒されるのは、このような教育方針の違いによるところも大きいと感じた。今後は自分もアウトプット力を意識的に鍛えていかなければならないと強く感じた。

②海外での経験

NUS や Yale-NUS の教員や学生は大学外のような場所に招待してくれて、シンガポールの他民族的な文化や社会を肌で感じる事ができた。また自分の英語によるコミュニケーションはアカデミックな場面よりもむしろ日常的な場面で困難を覚えることが多いことが明らかになった。日本でもある程度の英語力は身につけることはできるという自信がつく一方で、さらなる向上のためには英語圏に留学し、日常的に英語を用いて生活する必要があると感じた。

③プログラム内容

2月15日～2月18日の4日間、出口康夫准教授や Jay Garfield 教授（Yale-NUS）をはじめ、NUS と Yale-NUS の哲学科の教員と京都大学の学生らによる、インドの哲学者 Bhattacharyya の 'The Subject as Freedom' と、西谷啓治の『宗教とは何か』に関するワークショップを行った。シンガポール側と京都側はあらかじめ半年程前から勉強会や授業を通してそれぞれの著作を読んでいき、そこで生じた疑問点や解釈を提示し合い、議論するという形式を取った。シンガポール側の出席者はほとんどが教員であるため、彼らの胸を借りるつもりで、みずからの疑問や意見を述べた。インド哲学や仏教や現象学など幅広い分野の専門家が集まっていたため、様々な角度からの解釈が出てきて、「このような読み方があったのか」と目を開かされることも多かった。英語で議論することには大変な瞬発力が求められた。

④進路への影響

アカデミックな内容であれ日常的内容であれ英語でのコミュニケーションにはいまだ課題があることを再確認し、できるだけ早く留学し、普段から常に英語を用いる環境に身を置く必要があると感じた。

派遣中は Yale-NUS の Residential College 4 という寮の部屋を借りて2週間過ごしたため、全寮制の生活を少しばかり体験することができた。様々な分野を専攻する学生が集まっているため、分野を越えた人間関係を築けるし、週末にはバーベキューパーティがあったり野外ライブがあったりと仲間と交流するには良い環境であると感じた。今後、留学先を考える際には全寮制の有無というのも重要な判断要素になると思うようになった。